



実名敬避

土・日の2日間に冠模試があったせいか、月曜日は元気のない人が多いような印象だった。また、風邪気味の人も多いようだし、隣のクラスではインフルエンザも出た。しっかり体調を管理しよう。「よく眠ること」と言いたいところだが、なかなかその余裕もないだろうから、規則正しい生活と、手洗い＋うがいを心がけることである。

*

今日はちょっと文系の人向けの話であるが、「実名敬避」という言葉を聞いたことがあるだろうか？ 古典の授業で（この言葉そのものは使わなかったが）関連する話は色々してきたのだが、さて、この言葉の意味、漢字に字面から何となく想像がつくだろうか？ 簡単に言うと、貴人に対する敬意の表明として、実名使用を控える慣習のことである。実名の代わりに、地位とか（例：社長さん）、住んでいる場所（例：御殿場の殿）などで表現するわけである。

日本文学には有名な二つの「源氏」がある。言わずと知れた『源氏物語』の「源氏」と、『平家物語』に登場する「源氏」である。ところが、この二作品には大きな違いがある。『平家物語』の源氏には「頼朝」とか「義経」とか固有名詞が与えられているのだが、『源氏物語』の主要登場人物には、そのような固有名詞が一切与えられていないのである。

主人公の「光源氏」もあだ名（光るように美しい源さんの家の男の子）に過ぎないし、女性登場人物である葵の上・紫の上・明石の君・空蝉・夕顔・朝顔・浮舟など、すべてニックネームである。ニックネームが与えられている登場人物はまだましで、男性の場合は

それぞれの場面での官職で呼ばれるのが通常である。例えば、光源氏のよき親友でありライバルでもある青年は、「頭中将→権大納言→内大臣→太政大臣」と表現される。実は、光源氏でさえ「光」を冠した愛称で表現されるのは全五四帖を通して9回に過ぎず、あとは「男みこ」「若宮」「中将」「宰相」「大将」「大納言」「大臣」「大殿」「太政大臣」「六条院」「院」といった具合に表現されている。

官職のない女性が愛称で呼ばれない時は、「女」「女君」「姫君」「上」「御方」「宮」など普通名詞で表現される。それ故、読んでいる場面がどういう場面なのかをしっかりと理解していないと、誰が誰だか分からなくなってしまふことになる。

つまり、こういうところに『源氏物語』の難しさの一端があるのである。『源氏物語』の原文は古文としてかなりハードルが高いが、基本的な文法を理解してさえいれば、言葉レベルでの難解さは辞書を頼りにすることで何とか解決できる（理論的には…笑）。しかし、開いたページに登場する「大将」や「宮」が誰を指しているのかは、辞書では解決することができないのである。

『源氏物語』の各巻には、紫式部によって仮想された語り手が存在する。その語り手たちは、当時の宮廷の習慣、つまり「実名敬避」の習俗に従って物語を語っていたのである。なお、「惟光」といった従者は名前で表現されるが、それは彼らが「実名敬避」の対象ではない、つまり身分が低いからである。

（「学士會報」No909 今西裕一郎「実名敬避小説としての『源氏物語』」を参照した。）